Story

枕元で携帯電話が鳴っている。

夢を見ていたわたしは、その光景をあたまにはっきりと映しだしたままでいるのに、電話に出るために少しでも体を動かせば、光景はたちまち薄らいでいくことを知っている。さらに相手と話をはじめてしまえば、ちぎれ雲が一瞬のうちに消えるように、跡形もなくなるだろう。

体と意識をなるべく動かさないように細心の注意を払いながら、雑用でかかってきた電話の話を終える。それからまた目を閉じて、夢の光景をゆっくりと思い起こしてみる。

このうえなくシンプルな、美しい夢だった。

どこかの線路わきのような場所に、老人が小さな子を抱いて立っていた。二人の横にこどもの母親らしい女がいた。三人で電車を見にきたのだろうか。

虹が見える、と女が言う。おかしなことに肉眼で見るのではなくて、手にしたスマホの画面で見ているのだ。なぜだろう、とさらに言う。この虹はいったいどうしたことだろう、というニュアンスだ。老人はわからないというふうに首を振り、虹の色はいくつだ、と聞きかえしてきた。

夢の話をいくら熱く、やるせなく語ってもしかたがない。

おもしろいことと言えば、虹の色をたしかめるために、女が高くかざしたスマホの画面を指で押しひろげたことだ。すると、虹は七色どころか、たくさんの色のグラデーションをこちらに流れ落としてくる。虹というより、滝のようだ。それは液晶画面のものなのか、真に空からくるのかも判別がつかない。

すごいよ！　と感嘆するのは女ばかりで、二人はただにこにことそれを見あげているのだった。そのきよらかな気配は、夢がつねにそうであるように、彼らがもうこの世にはいない者たちであることを、暗黙のうちに伝えている。

おもえば、あれはわたしの父と幼い息子だった。

やがて線路わきにひとり取り残された女は、このわたしだ。

ところで、夢のなかでしぶくように流れ落ちてきたあの虹は、何を告げていたのか。